

無難禪師法語

全

特別

イ 4

3159

B 9

60 1 2 3 4 4 5 6 6 7 8 8 9 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1

14
3159
B9

新注法華經

四書集注

陶淵明全集

川老金剛經注

五經

李詩集注

註維摩經

老子國字解

杜詩集注

首楞嚴經會解

莊子集注

王維詩集注

臨濟錄

孫子國字解

乾道本韓非子 史記

正法眼藏

日蓮遺文錄

曹氏のり

徒然草

舊新約全書

潘翰譜

露伴全集

二序

魚難禪師假名法語二卷余珍藏之舊矣是殊師老
後筆從頭徹尾為後進之指南車而霧中子午盤
矣其語諄々披卷乃如接龍眉凡我宗師語錄以
國字記者甚稀也唯及師之嫡孫白隱禪師愈之
愈親蓋婆心之切取諸其易曉亦猶漢土諸師
用當時俗語耳古人曰言近而旨遠者善言也其謂
是歟據有卷尾定寶四季記別距今纔二百年
而我江湖中難多覩矣嗚嗟定別傳旨於今日者
抑誰力乎 下畧



明治廿二年正月

大德牧宗序

序

三國の人其ち同志を謂ふ別也心を一とするは佛の御教に非ざる也死を以てして死を了るる故に人を重く併なれども其れを併意は月を以て其れを以て也他偈に

識得於根元 離於法 誰知言句外 佛祖不傳處

生死を了る人ありを心の所を非ざるに
下は詞をまじはくも、
りてなる一 つくも其の不義は下を

肖を書
活は本背く

佛の川の深きをわづらひてのたゞけりも
やと佛よなほ也

延寶乙卯孟春書之

至道卷五



至道卷五 雜禪所法語上之卷

伊予子某 拜写

志れを迷ひてを迷ふ法乃道

なふかりけの冥佛 乎人

けしうの心明なるはたそあらを佛

一佛眼をらよみるふ日本の旅を佛をちか

悪気わくお悪気こいよ身を佛よけり

迷ひの相をかりて我身ふありけり

ふあそのとけりよいなりてあはれくかな

は事けり 誰ぞ知る可なれん 死ねん

至病むく眞苦やうくるなり。されば我物も
あらざるある。なりかほく世も生も
うけず。苦みおぼしむるをあらまへり。命短か
らん事をも。大方人をえろふ。齡七十にお
よよを稀なり。

一ある老人のおうりを行くよ。あそれのおふ
を書きむろをこがし。けれとむり。此
友を先立人の人よあり。そりんこすれそ
たなゆり。若をさつ。陸よたり。秋の夜な
こけし。斯事。神く。わむり。を思ふ。

らむ。新末の住よ。地獄。餓鬼。畜生。傍生。をす
み。う。て。わ。く。お。り。せ。の。り。う。よ。今。は。こ
たけら。佛。を。を。お。そ。ん。と。お。り。よ。う。て。予。よ
む。え。ち。え。て。な。り。て。た。り。わ。る。と。い。は。わ
れ。よ。お。り。宗。旨。を。と。く。を。解。と。答。差。手。を。り
決。ま。志。ふ。り。と。云。予。大。き。い。ま。を。申。三。念
佛。唱。救。珠。つ。ま。く。り。と。あ。や。う。と。い。ふ。う
の。人。よ。法。を。た。ら。の。う。よ。と。云。古。を。法。門。か。と
た。う。り。が。十。五。六。年。付。方。を。い。やく。法。門
い。へ。る。只。た。身。ま。り。新。末。を。ら。ぬ。を。大。り。れ

る阿やまりと非なりある僧にありたるま
り飛り行末をたふよし悟る知る非
悟らんと非りは身に業はくす業は
くす人に非りは身に業はくす念は併はる人と位
のをてて性をむらるよ平言只今死す
何方行はるやりまなりと非りなりと
之を極業行はるけなりと答極業
そづくそと之を業行はてあらわれんと
かしくしまるせかやしくと答平もと業
行はる死てそふと飛るなりと

をたくとるてなりと非りなりと
世故のを念はるは水をたるなりと
むらる業事を念はる心のなり事行はるかれ
さらしく心のなりはなよかありとと之を
たしくと答平言はるは自ら極
楽世界の水に行由し佛の水に行我宗の
悟なり業は行はるとなりと非りなりと
心に行はるとなりと非りなりと
万物はなりとなりと非りなりと
子を念て非りと禪の一悟を行は

悟のありて修行すれを日こ夜こお業也と云
が事柄の此の業は此を今と云ふ
尤も修行の業は修行の業に
身は業は修行の業は修行の業に
日を修行の業は修行の業に
か修行の業は修行の業に

一ある法師の弟子あるに修行の業は修行の業に
た修行の業は修行の業に
修行の業は修行の業に
修行の業は修行の業に
修行の業は修行の業に

修行の業は修行の業に
修行の業は修行の業に
修行の業は修行の業に
修行の業は修行の業に
修行の業は修行の業に

修行の業は修行の業に
修行の業は修行の業に
修行の業は修行の業に
修行の業は修行の業に
修行の業は修行の業に

一無と云ふニツあり、悪を一切に断つべしと云ふ
る事あり、天台宗の如きは、心を精進の
法也。

一念佛を思ふ人、佛の業をよきと云ふ、
うけ佛は、心より佛の心、うけ佛は
なりぬ、佛也。

永の業は、法をわかれを、何れか
あり、佛、心より佛なり。

一八万四千の悪業あり、水火の毒あり、
佛、これを佛なり、心より佛なり。

一つふれを、心より佛なり。

佛より佛なり、佛より佛なり、
心より佛なり、心より佛なり。

一教を大にた、あやま、それをおぼは、
る、心より佛なり、心より佛なり。

心より佛なり、心より佛なり、
心より佛なり、心より佛なり。

一伊智の国は、一代坐禅し、心より佛なり。

りはたうとうかつひを身法して死を可
之病苦をこけをみはつづけりあつて
の世禪を一世のすがた人の縁よありかし
一ある人釋身のたまふ一幸をよふ中
く詞よのぶかしかりをみえをわ
平出家の二まふけの寸をそりし事
形り羊の糸を三糸一碎りて樹下
上の位を居る人真の出家といふし
真け出家のそふくを我身は八万四千
の悪あるもの形りそふに大將とかはく



色欲利欲生死嫉妬名利け五つ也。おれはよに
一て退治しかり。晝夜悟をいふ一々よ身の
悪を不るは清淨なる人。悟といふは心
なり。その、是非邪正を能知り。邪を去り正
をとりつづめ。護り常の坐禪して如
來をすすけ。さうしてあくを吐り年月切
はつづかる。心安那つて。いよくおこ
たう守はつむらふ及て五欲を不るは。悟成
然して地獄激鬼畜生修羅の苦をそるれ
平業をやりて切はり。はれはなまらぬ。

万法よりなるをいふなり。ついでにこれより
世間の人をすべし。上根機の人には正しく見
を以てし。中根機の人には方便を以てし。下
根機の人には念佛を以てし。持世
の如く。そのせむの如く。人を知る。其の真
の如く。その如く。愚の如く。なり。一
一平がわつ。よと。記ある侍の如く。一童子わ
れよ。し。い。あ。の。ま。よ。こ。わ。り。子。子。て。た
べ。と。た。の。い。や。し。く。く。と。み。い。な。ま。し。て
か。そ。み。よ。と。か。く。そ。出。家。の。世。あ。る。如。よ。た



の如く。人といふ。一。言。を。も。つ。け。け。童。子。は。此
心。を。法。師。より。う。け。り。次。蓄。生。と。い。は。れ。り
一。初。發。心。より。佛。法。一。第。の。心。が。一。あ。る。は。そ。の。如
く。菩薩の如く。なり。かり。し。世。あ。る。に。心。か。け。は
蓄。生。の。成。る。一。う。た。ま。い。なり。
一。ある。人。より。い。は。れ。る。佛。法。今。世。より。い。は。れ。り
外。の。佛。を。も。つ。む。た。く。妙。を。元。來。世。一。物。法
を。妙。の。う。ご。く。お。也。法。は。あ。ら。う。れ。そ。妙。あ。ら。う
や。ら。故。に。妙。法。は。法。の。妙。難。に。は。け。り
そ。人。を。も。つ。見。性。し。て。新。任。坐。臥。は。あ。ら。う。せ

生下生
下世
脱欲
一字

一 身を修めよといふ佛法と云り。

一 見性する事かすといふが如くありて安
まありて万物にわづらひなくありて生非
と想ふて是非をわづらひ煩悩に任ず煩悩
をわづらひ死すに死すに生づくに生づく
聞かずばいづこに生づくに生づくに生づく
そとありていづこに生づくに生づくに生づく
おちりて夫の不及菩薩をわづらひて伊
云之。

一 米をたてて此身をたてよといふは

一 研の麦にけり事や此言を人の心の通て世人
名にまかりて外をせよ。是は米に實に米よこ
そりなれどもそれとてはけり物と云らそり
みそいづれ人佛をわづらひて心よたれて
はそりなれどもかたりにてはけり。

一 米よこりよるに世の人の大いなり

一 人の名をわづらひてはけり

一 ちのれはけり人なるをわづらひて悪人の心
をわづらひてはけり。利欲をわづらひて人
心をわづらひてはけり。是をわづらひてはけり。

聖賢の人にはあらざれをば其業ありし大
道人なりても、みにお人おれはく、くくす
たはく、かこは人の心をわはぬ、わなも、その人の
志なきおわけて、その人の心はをたぐ、その人す
ら、す、明りしもの、大將、く、く、人、心はわく、
一、そのまをば、そのま、わ、そのま、わ、
とは、わ、く、く、く、

一、たとく、その火は、そのもの、このす、水を、そのま、く、
す、火を、物を、このく、く、と、その火を、わ、く、く、
か、く、く、す、く、く、そのま、を、わ、く、く、く、く、く、く、

て、わ、く、く、く、く、

一念のふりよを、ちく、く、念の、く、く、は、人、念の
な、よ、を、か、く、く、

一人を、お、く、く、く、その、く、く、法師、く、く、
と、な、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
と、な、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
その、く、く、く、く、く、

一、その、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、く、

幸そあるのふかく信むる幸なり世を天
災をくくろむ

一清淨心をこころに起すものなり清淨をかく
なりし処をわけるごとくわけるなり我志
るうちには悪しきありぬ心のありぬあり

一悟を念を滅却するを念を以て身をな
すすべしをいふなり

一大道に入人なり一歩の歩みはあそびはくろ
しん宝をこころに置くなり大いれるあやまり

ゆき大道を心かけ人人を方法のわくをこころ

身のなりすわけごとく天お地外古今未来へい
てなりしものをいふれをよりきりてその一を
あそびをこころに起すなり清淨
なりすべしなり

一人と生れてを佛道はく心しおとあそび
の人をいふなりはみれその身の佛のせらわ
なり

一ある人大衆なりしなりなりなりなり守
る幸なりしなり

一最上乘なりしなりなりなりなりなりなり

守はまらるゝをいふ故に大事なり。然るに
よき事あり。そのよき事なり。

一平が牙子といふに工夫とてむついで事
をいふにや。平常を人を得直まの正聞信
濟禪師を聽法世依のそ人有。吾依をこ
れをいふに又吾得との終り。六祖大師
を應無所住而生其心。不捨長生。さるを
いふに。

一世の末にわたり。よき事なり。釋迦如
來は法三子ある年餘なり。田中。わたり

子年。よき事なり。よき事なり。信は信
よき事なり。万物のすゑを我知なり。知あり
よき事なり。信す。信す。万物のすゑは信
信のすゑ。よき事なり。知なり。何のすゑ
よき事なり。よき事なり。よき事なり。大道を
信す。よき事なり。よき事なり。よき事なり。大
い。信のすゑ。よき事なり。よき事なり。よき事なり。
よき事なり。

一。大に別人をいふ。よき事なり。心は人と
す。よき事なり。よき事なり。よき事なり。よき事なり。

宗の法をたつ事なり。法師の佛の心は心
にぬるめやとくもくちなる人を聞得事なり
— だんを侍のさ我宗の事なり。佛の心
ありはもる事なり。かゝる心— だんとも聞え
ぬ。あつなり。

一 法に達事なるぬ女は法を著すなり。
一人を宗に傳へしは法を佛の心を著す
宗の心と耳に法は法を著すなり。佛の心
人の心を著すなり。

一 法を佛の心と著すなり。佛の心は心
心を佛の心と著すなり。佛の心は心
かゝる心—
くさるしはあつなり。佛の心を著すなり。
かゝる心— 佛の心を著すなり。

一 年月日を書きしを著す。

一 物に法を著すなり。佛の心を著すなり。
① 心は法を著すなり。佛の心を著すなり。
一 物の事を著すなり。佛の心を著すなり。

天下の咎を皆承へては
 嗚呼其れ亦人たるに
 何事ぞ能くか 又慈悲
 ならん事を願ふ 又
 慈悲なる事を願ふ

一此の世にありては...

此の世にありては...
 一此の世にありては...

一此の世にありては...
 一此の世にありては...

一此の世にありては...
 一此の世にありては...

一 仕上りやうきをうけあはれまをうけおいて
 世に上りまをいそがれてまはくとつと
 一 ぢやうのまをいそがれあつた
 一人まわりのぢやうまのはわをいそがれ
 まはくとつとまをいそがれあつた
 ぢやうまをはいそがれまをいそがれあつた
 一 ぢやうまをはいそがれまをいそがれあつた
 まはくとつとまをいそがれあつた
 一 ぢやうまをはいそがれまをいそがれあつた
 まはくとつとまをいそがれあつた

ぢやうまをはいそがれまをいそがれあつた
 一 ぢやうまをはいそがれまをいそがれあつた
 まはくとつとまをいそがれあつた
 一 ぢやうまをはいそがれまをいそがれあつた
 まはくとつとまをいそがれあつた
 一 ぢやうまをはいそがれまをいそがれあつた
 まはくとつとまをいそがれあつた
 一 ぢやうまをはいそがれまをいそがれあつた
 まはくとつとまをいそがれあつた
 一 ぢやうまをはいそがれまをいそがれあつた
 まはくとつとまをいそがれあつた

かゆるをいふなりはつてやう死人の心は
るううなるを云死人も物をいへる
人といふは人をしてうらなふ大さの銭
人の世報を能くその人をその佛さ
たらしむるをいふなり

一世の人の心はうらなふなりはつてやう
大さの銭をいふなりはつてやう
おろしくすれをいふなり

一ある人平業大さの銭をいふなりはつてやう
凡夫即佛なりはつてやう

一ある人平業大さの銭をいふなりはつてやう
一ある人平業大さの銭をいふなりはつてやう

一ある人平業大さの銭をいふなりはつてやう
一ある人平業大さの銭をいふなりはつてやう

一ある人平業大さの銭をいふなりはつてやう

一ある人平業大さの銭をいふなりはつてやう
一ある人平業大さの銭をいふなりはつてやう

一ある人平業大さの銭をいふなりはつてやう

一ある人平業大さの銭をいふなりはつてやう
一ある人平業大さの銭をいふなりはつてやう

一 己の心を正すべし

世の中を正すべし

己の心を正すべし

一 併せて心を正すべし

己の心を正すべし

己の心を正すべし

一 己の心を正すべし

己の心を正すべし

己の心を正すべし

一 己の心を正すべし

己の心を正すべし

己の心を正すべし

一 己の心を正すべし

己の心を正すべし

己の心を正すべし

一 己の心を正すべし

己の心を正すべし

己の心を正すべし

一 己の心を正すべし

己の心を正すべし



一 修行の法を説く人なり

一 修行の法を説く人なり

戒律の法を説く人なり

法華の法を説く人なり

一 修行の法を説く人なり

戒律の法を説く人なり

一切の法を説く人なり

一 修行の法を説く人なり

戒律の法を説く人なり

法華の法を説く人なり

一 修行の法を説く人なり

戒律の法を説く人なり

法華の法を説く人なり

一切の法を説く人なり

一 修行の法を説く人なり

戒律の法を説く人なり

法華の法を説く人なり

一 修行の法を説く人なり

戒律の法を説く人なり

法華の法を説く人なり

一 心をきく

てくろくをすあはれ人のあはれなり
一 心をきくは一徳なり

一 坐禅の大業

せあはれ坐禅を人の志なり
あはれなり坐禅の志なり

一心

佛性あり天をこころをこころ
たはれなり佛は心をこころ
たはれなり佛は心をこころ

一 念佛行大業

佛は何なりをこころなり

一 念佛のあはれなり

たはれなり念佛の志なり
あはれなり念佛の志なり

一 法師

たはれなり法師の志なり
たはれなり法師の志なり

一 研さしをるをてうりま事を

人のいへあまのまはけけいふくの

ありきにむるまをていふ

一 研さしをるをてうりま事を

あまのまのまののりまをていふ

研をさるすむくはけけいふ

一 研さしをるをてうりま事を

死すは佛とくやまのり

いふはけけいふまをていふ

一 研さしをるをてうりま事を



研さしをるをてうりま事を

あまのまのまののりまをていふ

一 研さしをるをてうりま事を

あまのまのまののりまをていふ

いふはけけいふまをていふ

一 研さしをるをてうりま事を

あまのまのまののりまをていふ

いふはけけいふまをていふ

一 研さしをるをてうりま事を

あまのまのまののりまをていふ

ちくけか一作にふとたに

一五山の釋教の

ひいふまはるくはあはる

こゝろのたはるはあはる

一あふの法をよふ法師に

まのまはるくはあはる

まのまはるくはあはる

一は人の命をけりて人よ

廿一あはるくはあはる

あはるくはあはる

一心れあはるくはあはる

廿一あはるくはあはる

あはるくはあはる

一あはるくはあはる

廿一あはるくはあはる

あはるくはあはる

一ある法師よ

廿一あはるくはあはる

あはるくはあはる

一大法をよふ法師

母中女人のつと記をたすは
あまのあまのあはわつと記をたす
一物まをすしむ人

何事もはげれとけりしあまの人を
あのかきしははきいそつるは
一そいひしにさす

そいひしにさすたあまのまをた
あまゆよあまのまをたあまのま
一大きこまをよ人
す記のたつるつとみつるあまのま

あまのまわれれはつとつとつと

一あまのまをたつとつとつと
あまのまをたつとつとつと
あまのまをたつとつとつと

一むろ人ほよまをたつと
あまのまをたつとつとつと
あまのまをたつとつとつと

一生死ふまをたつと
あまのまをたつとつとつと
あまのまをたつとつとつと

死下はまじし^レ此^レの^レ心^レは^レ死^レに^レあ^レら^レず
只^レの^レ心^レは^レ死^レに^レあ^レら^レず

一應無所住而生其心

何^レも^レな^レし^レ心^レの^レま^レじ^レり
その^レ心^レは^レ死^レに^レあ^レら^レず

一生死即涅槃

生^レ死^レは^レあ^レら^レず^レ死^レは^レあ^レら^レず
死^レは^レあ^レら^レず^レ生^レは^レあ^レら^レず

一併ふまじ人よ

世^レの^レ人^レの^レこ^レろ^レの^レま^レじ^レり

な^レま^レじ^レた^レつ^レあ^レら^レ佛^レの^レま^レじ^レり

い^レた^レは^レあ^レら^レず^レ死^レは^レあ^レら^レず
人^レの^レこ^レろ^レの^レま^レじ^レり

一た^レま^レじ^レ人よ

い^レた^レは^レあ^レら^レず^レ死^レは^レあ^レら^レず
た^レま^レじ^レた^レつ^レあ^レら^レ佛^レの^レま^レじ^レり

一念佛の心よ

い^レた^レは^レあ^レら^レず^レ死^レは^レあ^レら^レず
あ^レら^レず^レ死^レは^レあ^レら^レず

一已身弥陀唯心淨土

一 **す**らよなむあまの **佛**の善ふれそ
ふしけしとてふしあまの **佛**のあま
一 **道**の **和**吉 **同**俗 **同**云 **和**吉 **還** **佛** **狂** **世**
少 **云** **無**

舞 **と** **り** **の** **あ** **ま** **の** **佛** **の**
むし **あ** **ま** **の** **佛** **の** **あ** **ま** **の** **佛**
舞 **の** **あ** **ま** **の** **佛** **の** **あ** **ま** **の** **佛**
く **あ** **ま** **の** **佛** **の** **あ** **ま** **の** **佛**
一 **道** **の** **佛** **の** **あ** **ま** **の** **佛**
舞 **の** **あ** **ま** **の** **佛** **の** **あ** **ま** **の** **佛**

二 **美** **あ** **ま** **の** **佛** **の** **あ** **ま** **の** **佛**

一 **三** **麻** **三** **介**

佛 **の** **あ** **ま** **の** **佛** **の** **あ** **ま** **の** **佛**

な **あ** **ま** **の** **佛** **の** **あ** **ま** **の** **佛**

一 **あ** **ま** **の** **佛** **の** **あ** **ま** **の** **佛**

和 **吉** **の** **あ** **ま** **の** **佛** **の** **あ** **ま** **の** **佛**

ま **あ** **ま** **の** **佛** **の** **あ** **ま** **の** **佛**

一 **あ** **ま** **の** **佛** **の** **あ** **ま** **の** **佛**

和 **吉** **の** **あ** **ま** **の** **佛** **の** **あ** **ま** **の** **佛**

り **あ** **ま** **の** **佛** **の** **あ** **ま** **の** **佛**

引しけしきくはありきぬ人そかき
まのがこころもしる人か
のりせきわくならぬ人あは
あはれにありのるおろし

法語

一才のおと佛なりたよくそこころのこころ
かろふくよき人のよし御守と書く
一筆は行しむれあを佛のけいこころ
一なもしおろはぬまのこころもかしするがかり
いよかすつらぶくとぬるるりそ

おとほひのおたすあはれしげ

諸り世々を滅は生滅を已寂滅を示す
三十一のこころなり
一神そこころなり
たのぶのこころなり神と命は
のこころありのるかれらるる
一徳そこころなり
天命はまのあそまやむゆれらるる
れははこころなり即性も性
すまをさこころなり

一併きこよ人なり

力不足れらるるなり身は八万四千の窓あり
身は分れそ大安楽なり是れは神なり是れは天
なり我れ併きこよ人なり

一出家精進すこよ人なり

出家精進かすらす五辛酒肉を断つ氣血甚
なり故に身は清く心は静なり是れ有徳皆
我れ友也是れ君臣父子夫婦兄弟朋友は
のれは魚鳥にへんせん人なるを志すなり
これらなる
ていなり



一ある人民をたれんが人なり云ふ
かわりにたぬをわくの寒にたれをわくの
飢を食にたぬをわくの民なり

一少将をたれんが人なり嚴子よ世系ゆ

られんが人なり

一予一慈悲 予二無欲 予三万依怙なり

此三言を奉つて玉を供ふもやその心を
平心をあよりのれんが人なり

一釋かよまやう佛は法は教なり
こを妙と名付て妙法なり

阿字と名付て真言をとり

佛と名付ておん言ふをとり

軍九年一字不説との語を根を今故也

之来少を字を事なりけり此のゆへに此一

字をとりけり此を得るすを禪とす

なり

一道を修むる人五人とさきを知る人

ありしをわづらひしを人なりおのれ

する人ありしを人なり此を修むる人なり

一大名と名付し生れ事とて世にありけり

さるる能く慈悲なり功德なり今

世に大名と名付しその心なり同果なりあらそ

すなりたれど大名と名付し其意なり

なりけりその心なり此のゆへにありけり

なりけりありけりあり人我に同生智事

徳ありけり生國なりけり此のゆへにあり

西國又ともなはれしなりけり此のゆへにあり

とてなりけり此のゆへにありけり此のゆへにあり

今日ありありなりけり此のゆへにありけり

なりけり此のゆへにありけり此のゆへにあり



その身死すれを思ふ所もさうなるは
「いへば」はまをり記せしはうちし念引
や只かこれへまなまのありしをあるは
そりれし法めいあ平云法のいあよ
て寺へ来るいふてこのあそ孫女を死す
新常のうたをよ心あれを苦生りか
あしつすれはま志の心あれを人し
まをうたのうするをれ念をかくし
身を念れやれ併しよそか之し初
すうしは持す一念なりしを解く

こゝと一祿のかれうしした心は

一火ありしをありしあありしをありしや
やこ大そ入のありしをれをありしや
るれりしれをそ人としよそしよそ之と
よあそししし

我尾門徒中しはなま

一坊主はし純の大極意也無所化るは世す
大資人也

一修行果満人の師と解しと記す此之
重宝也一は世の師のこも大そみの師也

おくす 打色
のこころを 禪
僧の衣類
を包み入る
の形

一紙半強をふたにきき事なり

一平常身をほくまやうしつて身のみあはし

ふ事なり法下汗併てよそを

一人がわこそのまじうらま毒茶と并之大

そ成就之時人のまじむあのをく

そ人かこすくさゆしなり

一修行之内人うれあまると記を

まわつたす業はくると候

一夜をあつすも平まれらる物なる事

いれすたにまかると守り大い

そくあま入ておしりやくそくの日

あのをまじり

一大き成就せらるる女をちのく

一心ういふ家なりとるるべうり

お九条保常のまじりおそ古証の証

まじり

一人りかへう記事あり新証所正

是大きまじり人みやしと并りた

中心をまじりまじりまじり

まじり心は

一 人を知るに如く世に如く世に如く
一人を知るに如く世に如く世に如く
一人を知るに如く世に如く世に如く
一人を知るに如く世に如く世に如く
一人を知るに如く世に如く世に如く
一人を知るに如く世に如く世に如く
一人を知るに如く世に如く世に如く
一人を知るに如く世に如く世に如く
一人を知るに如く世に如く世に如く
一人を知るに如く世に如く世に如く

一 ありては其身を以て
何れかありては其身を以て
一 ありては其身を以て
何れかありては其身を以て
一 ありては其身を以て
何れかありては其身を以て
一 ありては其身を以て
何れかありては其身を以て
一 ありては其身を以て
何れかありては其身を以て
一 ありては其身を以て
何れかありては其身を以て

一 予の死を以て吊するは第一身を法
 心をけしむゆえに如斯く吊人は
 かよふ年死をの念をくつし心よつ
 こち付しめりてし子事如世
 念よしり吊して思重る子如如
 さ如如 **賢** はたしめりて
 ひよの如男女其は思念は多かり
之入 しよ
 一 親を如東の佛心をくつしり
 たちをい出がしよ **而** たりしを念と



一 佛法をりりしり **一** 何り也
 下坊をそ心と **呼** 都人を念
 とし **二** の佛必を **筆** 及るわ
 し **三** ののよゆつ **女** 今一 **妹** 出
 たり **下** 下 **下** 下 **下** 下 **下** 下
 如る人 **如** **如** **如** **如** **如** **如**
 一 衣を **三** 如 **如** **如** **如** **如** **如** **如**
 一 **子** **子** **子** **子** **子** **子** **子** **子**
已 故 **一** 女 **一** ち **一** づ **一** ぐ **一** ぐ **一** ぐ **一** ぐ **一** ぐ **一** ぐ **一** ぐ
 け **一** 一 **一** 一 **一** 一 **一** 一 **一** 一 **一** 一 **一** 一 **一** 一 **一** 一

あつたなり

一人と名を將來とて位よめたる者
不尾妙あつたなりとありて
中野と云ふや証あつたに三十一
のありし下人のあは天竺とて大
一と云ふもこれとて市人なり
ありしに幸なり兵法も軍法も
めりて大にふさのふけのよる
その名をかくがごとく武士の
一と云ふも此の如きなり



一と云ふにどなりのおくはれたる
女と云ふとてかたごころ入て
いふもやかるめいよのゆと
こころ書とてむき我呼ゆあ
りて女と云ふもいふなり
これと云ふも國のあつたなり
一と云ふも案とてこれ案の生
そ白と云ふなり故に年を
なけれとて心子利歎は危
人とのあはれありて

をこゝろにすわをこゝろにすわ

一維摩居士の二名に二百人をすしとせ

りよ大居士の祖大師の業をうりて後

世をぬじか如来のよにゆをのよ何

えれよふおわゆる心そ力事りりしと

のよえけちをすたすて常の常心りり

と今りのよにゆへにゆへは物なり

てゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

たりにゆへにゆへにゆへにゆへに

このよにゆへにゆへにゆへにゆへに



ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

をゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに



世をいつわてくまをばしつゝ人の身
 心うきまをいしむる家の事老わつ心ししち
 かあぬやういふと伊弉諾のわいぶがた
 今すまふとぬくぬうたわん今まや身をよ
 くせんとおのしひ~~む~~神也如東の信のふ
 う~~を~~おりあぬて大あんとく之いふ
 ぬ~~佛~~のむ又いふくうう~~を~~おり~~常~~よ
 なるいふおあり~~一~~おわれそいつよわ
 心安あんとくがむ今まやわその方なま
 とやうし~~ま~~むつう~~一~~かりはるの今も



ちよほ心しなりとるあうれ~~一~~るりおのむ
 ちよあんとく~~一~~おれそ人も~~一~~なりと
 おりつう
~~一~~おまう~~一~~坊とあるとに~~一~~常~~一~~むつ~~一~~なり
 その~~一~~し~~一~~禪と~~一~~なり~~一~~禪と~~一~~知る~~一~~と~~一~~おのむ
~~一~~禪と~~一~~いふ~~一~~なり~~一~~常~~一~~無言~~一~~なり~~一~~坊
 寸~~一~~なり~~一~~おり~~一~~よ~~一~~あ~~一~~なり~~一~~なり~~一~~事~~一~~なり
 大~~一~~元~~一~~来~~一~~知~~一~~し~~一~~あ~~一~~や~~一~~ま~~一~~る~~一~~なり~~一~~事~~一~~を~~一~~た~~一~~た
 常~~一~~よ~~一~~学~~一~~に~~一~~苦~~一~~ん~~一~~道~~一~~り~~一~~く~~一~~なり~~一~~を~~一~~た~~一~~た
 あり~~一~~なり~~一~~なり~~一~~あり

佛に何を佛と云く明かす、
云うわそち佛と云はるは

一ある人は心のつとめをささよすりて
人の心一をさす一は是はゆるするあり
心よりけしんはまや一

一季末を一人のおるれそ世にけり
か女来妙法との結し、大にけりあ
かわるわ

一けきり一教のこよ一わそ一可めとて
けきこり一とてよそ一可れ若る

けきこり一とてよそ一可れ若る
ろすをわ大系最上系人月は如来を
教了方法を不言如来と並進切法
勿論世虚世に法世を

一ある人地獄を言、予云んぢ身をせり
と云、極楽を言、予云んぢ身を言、佛を
言、心は言、たると、かれ、とて、死人を言、
一予云んぢ、死に、死に、死に、死に、
我宗、悟る、たんと、古、今、昔、今、
前、あ、わ、世、わ、か、れ、と、て、何、し、る、と、

人の心は地法をさすらんかきん
こころをさすれそ共何しる
人けふの地法をさすらんかきん
かりんそ法をさすらんかきん
一併は天地の内の事なり大吾なり
人を天地をかりんそ法をさすらん
心
一併は天地の内の事なり大吾なり
人を天地をかりんそ法をさすらん
心
一併は天地の内の事なり大吾なり
人を天地をかりんそ法をさすらん
心

心の動かし難きをわたりしる
人の心は地法をさすらんかきん
こころをさすれそ共何しる
人けふの地法をさすらんかきん
かりんそ法をさすらんかきん
一併は天地の内の事なり大吾なり
人を天地をかりんそ法をさすらん
心
一併は天地の内の事なり大吾なり
人を天地をかりんそ法をさすらん
心
一併は天地の内の事なり大吾なり
人を天地をかりんそ法をさすらん
心

いたるに形かくあよらかよ人のそま
そるけり

かろありしに知るる上人をこころに結
つて天下平けり國を治む時を照可し
おまごころの心を家可しそけを志
すて下り我意のよのせりけあよた
まの人のしを造こよりありのけ
下流をその心に我意のよのせりけ
そつて下り業を造こよりありのけ
たて下りそ如念を造りけりけりけり



いづのまの形かくあよらかよ人のそま
一併世と帝出あつてつれとをそまへし
かろけりそまの形かくあよらかよ人のそま
併と高き人ありし

一併列とよ人の心れをそまへし
けりけり我とそまの心れをそまへし
事とこころをそまの心れをそまへし
我とよまの心れをそまの心れをそまへし
こころの形かくあよらかよ人のそま
そまの心れをそまの心れをそまへし

極楽と云はれしは、
何と云ふたふらふ

新しは、
はるか昔の

うきうき

一人の、
一人の

人も、
ては

人の、
人

今、
今

東、
東

侍、
侍

は、
は

子、
子

か、
か

怪、
怪

一、
一

あ、
あ

来、
来



一をすあけり。一をたかくしあけり。
 うけりし。おろし。かたり。みる。こと。

摩訶。大也。波羅定名。般若。智慧也。

不知慧。波羅定名。般若。智慧也。

心經。此經要月。行深般若。

從是。有注也。

觀自在菩薩。已往我。行深般若。

般若波羅定名多時。

照見五蘊皆空。度一切苦厄。

色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。

受想行識亦復如是。

是人甚妙。是諸法皆名相。

不生不灭。

不生不灭。

不生不灭。

不生不灭。

不生不灭。

不生不灭。

三
世。佛。依。救。系。法。經。者。
故。云。善。心。性。之。心。如。空。性。
故。云。救。急。法。所。多。善。心。性。
上。見。之。性。如。空。性。也。善。世。
心。性。是。世。心。性。也。何。心。性。
不。虛。一。切。世。若。心。性。故。說。般。若。



波。羅。維。密。多。咒。之。外。了。亦。有。百。千。之。外。
即。說。咒。曰。上。下。友。
編。譯。之。波。羅。維。密。多。經。俗。稱。譯。
善。提。薩。婆。訶。

此。咒。之。外。有。百。千。之。外。
五。五。五。五。五。

不。此。冊。寬。又。庚。戌。末。秋。豈。不。有。一。冊。
為。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

たもとにひきかかれしにたぶらぬらく
かほのちんぢ字をたひてしつせに
後法少、後法世にたひてしつせ
生をたひてしつせにたひてしつせ
をのたひてしつせにたひてしつせ
ふしつせにたひてしつせにたひてしつせ
はこれこそしつせにたひてしつせ
おもしろいしつせにたひてしつせ
こころをたひてしつせにたひてしつせ
かほのちんぢ字をたひてしつせ



あふらぶ
おのれは
おのれは
おのれは
おのれは
おのれは

てんじふのちんぢ字をたひてしつせ
おのれはたひてしつせにたひてしつせ
おのれはたひてしつせにたひてしつせ
おのれはたひてしつせにたひてしつせ
おのれはたひてしつせにたひてしつせ

人の癖を忘れず 即心記 自性記 二冊 法語集
若立軍女 ためしや けりて 人可

至道尾世難源師 法語下之卷

一 休和為法語 為法一句をば 是に 万劫の苦を
離れ 大おれ 至道 一 誰人が 是に 詞を 添却 為法
と する 悲歎 甚し 大苦 知識 書 為 人 未 世 々 如 此
我 如 乎 世 知 世 々の 苦 する こと あり けり 思
百 丁 下 帝 洞 子 一 由 子 幸 免 一 夕 一 帝 一 美 濃
の 國 國 守 け 當 夫 中 那 一 最 難 和 為 の人 是 一
江 戸 一 帝 依 の 時 和 為 不 便 の 息 長 一 帝 一 世 一 物
一 帝 一 示 示 思 三 十 多 修 行 一 帝 一 世 一 物
一 帝 一 和 為 の 帝 思 一 帝 一 併 け あり 一 帝 一 示



を^知佛法人の教を^しと^す

一或内^外字^一市^一言^一少^一は^一元^一夫^一忽^一聖^一人^一と^一なり

明^二口^一法^一あり^しと^す事^一海^一人^一又^一俱^一と^一予^一拙^一を

不^一顧^一孔子^一の^一市^一為^一と^一あり^し筆^一を^一か^一る^一事^一也

一或人道心^一教^一と^一く^一て^一人^一と^一言^一予^一思^一よ^一昔^一も^一わ

そ^一心^一り^し苦^一と^一あり^し少^一も^一あ^一れ^一行^一悪^一けれ

て^一天^一言^一を^一こ^一し^一と^一言^一心^一れ^一大^一事^一中^一に^一筆^一及^一こ^一し

大^一邪^一を^一心^一教^一す^一人^一難^一た^一け^一也^一予^一一^一財^一色^一思^一也

あ^一世^一に^一交^一る^一事^一何^一第^一に^一心^一清^一淨^一と^一け^一伊

の^一交^一り^した^一り^しけ^一ず^一新^一任^一聖^一人^一を^一其^一業^一を^一人^一の^一之



高^一人^一と^一も^一あ^一り^し邪^一作^一の^一我^一心^一本^一性^一を^一佛^一之

養^一す^一れ^一惡^一を^一以^一て^一穢^一す^一は^一何^一と^一成^一す^一と^一云^一居

り^し若^一く^一能^一く^一勤^一の^一心^一明^一な^一れ^一かり^しそ^一の^一れ^一事^一也

紫^一報^一を^一慥^一と^一知^一り^し少^一も^一我^一意^一を^一か^一り^し而^一況

法^一あり^し難^一と^一し^しる

一或人^一語^一滄^一會^一山^一中^一に^一三^一年^一を^一住^一す^一何^一と^一云^一良^一し

時^一に^一星^一の^一出^一没^一を^一求^一め^一る^一や^一り^しと^一云^一る^一事^一也^一及

か^一し^一初^一に^一狼^一眼^一の^一走^一を^一び^一た^一り^しと^一云^一る^一事^一也

毒^一虫^一と^一此^一法^一師^一の^一不^一信^一也^一此^一を^一し^しる^一事^一也

年^一も^一及^一へ^一し^し久^一の^一為^一と^一なる^一事^一也^一是^一を

消か

いふ形なり乎。予曰。能師ふ能。故也。自
て其する事。天は通る。

一或人曰。心は人踏倒打あせり。その心は

なり。予は。いふ形なり乎。予云。その心は。意

なり。予は。いふ形なり乎。予云。その心は。意

なり。予は。いふ形なり乎。予云。その心は。意

なり。予は。いふ形なり乎。予云。その心は。意

なり。予は。いふ形なり乎。予云。その心は。意

なり。予は。いふ形なり乎。予云。その心は。意

なり。予は。いふ形なり乎。予云。その心は。意



一或人佛をうまの久けれ。も。身苦。絶。す。い。く
た。一。業。去。也。

一或人佛をうまの久けれ。も。身苦。絶。す。い。く

た。一。業。去。也。

一或人佛をうまの久けれ。も。身苦。絶。す。い。く

た。一。業。去。也。

一或人佛をうまの久けれ。も。身苦。絶。す。い。く

た。一。業。去。也。

一或人佛をうまの久けれ。も。身苦。絶。す。い。く

た。一。業。去。也。

一或人佛をうまの久けれ。も。身苦。絶。す。い。く

た。一。業。去。也。

おし心懸立共或君に友へさしつけられ
あり旧も送しあり或は位す友の人
だけれ我名利未盡し悦び心妬れあり
山林に入已独りあり世に人さつてたす
しあり妙法我ありいさうなごめけり
一道心堅固より人と思ふ能く師あり
我下心を懐き悦ぶ是を一つりてさす
深山市あり信居いこころ心よりあり
一檀那を持人しを便するし有る心
天地の内の信ありされ密業きつ



天地に一旅する時下の人を敬する
事さるる也
かくてあつち衣食住しむま
いさうあり
一善心す人物毎に悲しむ
し衣食住あり心天爵交はる心すは
万不足を者とす

延宝甲寅冬太河校書原を

至道卷

光の波をせり、師なる事也。灯の下に書か
るも、我友一人の形。今夜もや、
上なる人、教多し人を見、事書し付付
る言た、ぬも見あり。玉人。

一禽獸之愛、永劫深事なり。比丘比丘
尼の情欲なり。

一或る人間大法、帝在心を教也。又問ふ、如何保卷
せん。予云、悟りて天地の如きぬらなり。

保卷は汝の心あり。

一或る大敵也。暫も油断するに、
一全を、飢乏の憂や、人の為や、悟りて、
一或る人、心悟るる、示火、予云く、
一或る人間、古々難く悟也。と云、
不悟佛性ありしなり。

一或る人間、古々難く悟也。と云、
不悟佛性ありしなり。

予云く亦祖大師下より宗餘人馬祖下より百三
餘人大悟の人あり又問悟如何予云心也問如何
何是心予云世一物又問如何世一物世
一言

一凡夫不知因果悟則知因果修行難因果以
圓聖を去事を了今既る其の佛代り
のしむ生をさしるしとあり

一亦其人はも聖代のりる何ぞ人の心は
かく事はる予云佛さしるしと生を
さしる事お徳とくあるこり物と云るあり

一亦一天下れはも聖代のりる何ぞ人の心は
かく事はる予云佛さしるしと生を
さしる事お徳とくあるこり物と云るあり
今此の心悟て人の心なり是れ佛也如事と記
はるなり此三事お徳とくあるこり物と云るあり
一亦人唯一念法無二亦世三を問予云一
念法は妙なり妙は心なり心は世と物と
念と物と大地のりるなり天地も形なり也
二亦世三は念法も悟る事なり物と云る也
一亦人よ五戒をたしるるるるるるる

五智の如來
五智は大圓鏡智
平等性智清淨智
法界智妙觀察智
智成所作智
五如來は空
生佛阿彌佛
毘盧舍那佛
不空成住佛
阿彌陀佛を
指す
六地并
觀天賀、放
芝王、金剛幢
金剛悲、金剛

空、金剛、悲、金剛、幢、

予云、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒也、皆於此に
罪也、悟て其の物也。

一或人五脈を問ふ予云、五條を五知の如きと名
づけ六腑を六地と名づけ七情を七情と名づけ

の七佛の名付也、其の心動如斯

一或人佛の心動、地獄を名づる、其れ惡
を佛と名づけ、其れ佛の心動、地獄を名づけ、其れ佛

の心動也

此れ業の心動を名づけ、其れ佛の心動也

この心動、其れ佛の心動也

一或人佛の心動、其れ佛の心動也

其れ佛の心動、其れ佛の心動也

佛の心動、其れ佛の心動也

佛の心動、其れ佛の心動也

佛の心動、其れ佛の心動也

一今存天下の心動、其れ佛の心動也

佛の心動、其れ佛の心動也

佛の心動、其れ佛の心動也

一佛の心動、其れ佛の心動也

佛の心動、其れ佛の心動也

須菩提若有八人言如來者來若去若坐若臥
是人解我所說義何以故如來世所從來
亦世所去故名如來

此六人言人王若人王若人王若人王若人王
若人王若人王若人王若人王若人王若人王
若人王若人王若人王若人王若人王若人王
若人王若人王若人王若人王若人王若人王
若人王若人王若人王若人王若人王若人王
若人王若人王若人王若人王若人王若人王

一須菩提自佛言世尊佛得阿耨多羅三藐三菩提
其提為無所得那佛言如是須菩提我阿

耨多羅三藐三菩提乃至無有少法可得是名
阿耨多羅三藐三菩提

一切經の極意也いふなりなり死入りなりなり

一須菩提若三千大千世界中所有諸須弥山王如
是等七宝聚有人持用布施若人以般若波羅
蜜經乃至四句偈等受持讀誦為他人說於前
福德百分不及一千万億分乃至等譬喻所
不能及

是のい人をあむわし佛をい入りてのいなりなり

わろふりあつた移入ころを以て
山又十移入のつとめあり口は苦きなま
れも火井より火に燃えたること
とよ人ともあり

一佛のすくひありては佛の
よみよ心をたすよ一たかか
れり我々のちとありては地獄
極楽よりよおとすは佛を
楽しむる人といふことよ
世もかくありては
くすみれりては

のりてかたしとては

一此世ありては佛のそと
ありともあり

一佛のそとありては世
とありともあり

一よおたり佛のそとあり
一代ありともあり

一或人のありては
ともあり

一ありてはせいにわ
加賀の園文

のうしや通し時あらふよなきらうやうまねる
 ありけりね入つてしるしむくくもよ言二
 ころそいあけるふあはれしむくくもよ言二
 ぞねいさしめしむくくもよ言二
 己夕しそむく入つてそれいせあかりのゆき
 二首をくひ二すすちあやうしむくくもよ言二
 二ならしよはうらむくくもよ言二
 いみしむくくもよ言二
 ともひしむくくもよ言二
 よいあへしむくくもよ言二

をりけりね入つてしるしむくくもよ言二
 入しよ下女とのそくもよ言二
 邪なりそねははれむくくもよ言二
 りあけりね入つてしるしむくくもよ言二
 りあけりね入つてしるしむくくもよ言二
 一あけりね入つてしるしむくくもよ言二
 十二月のうら愛しよ言二
 くそあけりね入つてしるしむくくもよ言二
 せりうくとあけりね入つてしるしむくくもよ言二

自己心立得天罰

天更不罰諸衆生

自己心則墮塗炭

万劫千生遠佛果

適受佛心得佛躰

豈不用如々心法

應物則如水月

無所不到無所滯

離万事直本來空

古今不變謂佛法

三不の事子不文はより

け意のよ

たそりけいされはふそあまた

仏いものよさそらあわら電

一ある人仙事に布施のやいをもよ

終し三陰のふせりくけ三陰のふせを

いふも坊主のいれよよ三陰のふせを

いふも坊主のいれよよ三陰のふせを

いふも坊主のいれよよ三陰のふせを

いふも坊主のいれよよ三陰のふせを

いふも坊主のいれよよ三陰のふせを

いふも坊主のいれよよ三陰のふせを

いふも坊主のいれよよ三陰のふせを

いふも坊主のいれよよ三陰のふせを

いふも坊主のいれよよ三陰のふせを

由よそ吊あやまねは世にちくしやうと
成る疑外

一あると人々を川にぬびる形をさや

一ある時はりあ川人を心もやうに保よ

そはけはるやうにさうりやあつるをわ

すけしそ人々たけり

人をすりよこす人々をすいあすこ

たかおるよるにねるおりよ下

可好のあや

一天のわげいわのさるおらあはん一た

家うたおもれそあつらあしこお

のねおきそありあつらまよる

一あしの子を書ありの人のたかおりよ

あせれし人におりあやあしつら

あやがさのませあし人々せよて

くていりりりりりりりりりりり

あやがされよあつらあつらあつら

くあつらあつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつら

あつらあつらあつらあつらあつら

一天を身作念を心作是非を辨むれを
八十字の念ありおれあま苦しむをきかこ
大道守り人々の大幸なり

孔子の心をついでゆくとしゆくとき
有りてふるといふ人なり

一孔子世を去るれり十年は程氏足る世に
孔子の心をうつす具付今日より今儒者の
元祖也視箴は蔽交於あそ中則遷制之
外以安其内をその理をかたくり予也
は世の人必あやまり人をきく言ふふこの



一孔子の心をついでゆくとしゆくとき
孔子の心をうつす具付今日より今儒者の
元祖也視箴は蔽交於あそ中則遷制之
外以安其内をその理をかたくり予也
は世の人必あやまり人をきく言ふふこの
一あるの日は玉に珠団を帯むるよりあま
来る珠をきこやわ舟をこころよ大に
あやまり也予をきく言ふは世の
一孔子の心をついでゆくとしゆくとき
孔子の心をついでゆくとしゆくとき

此等のたゞしあやむきそれの足らぬ天
奈も人の身ごとく神とまるといひよれり
らりぬるやよき心の中へ徳さのこえり
心の中へ天竺の徳さの心也三心心
ちい身ぬるやうい徳さ神さの身を
たしくしよき心ありらるるまぬる也
天竺も身をぬるやあまらるるを
故に天竺もまらぬ神のさぬ也
がわらそのひきあつたあつた也
徳さのまらぬれそ誤なり人我のまらぬ

まらぬぬるまらぬ也上人はみちをり
らるるそその下は徳さの徳さ
人のまらぬるをぬるやあまらるる
あく念のひきあつたあつた也上人の
い天下の徳さの徳さの徳さの徳さ
一上人はみちをり天竺の
上はみちをり天下の徳さの徳さ
たまらぬ天竺の徳さの徳さの徳さ
也徳さの徳さの徳さの徳さの徳さ
とあつたあつたあつたあつたあつた

ふまゝに身を帯びよる念よりせむる
なりてこそなりけりわが我の身は鼻
を這りしころをがし心のてをてぬく
ひりよふ人いふよ不及す本玉土を
りしむいりちのちよ行住坐臥家
をいふに世にけりちよけり
天下をたのむる玉をこそめりけり
より玉をたのむる玉をこそめり
けりよふ人いふよ不及す本玉土を
りしむいりちのちよ行住坐臥家
をいふに世にけりちよけり

る事うたうしけり

一、このころあるふれは信百性の代官せよ
頼那にけりあり書子歌事あるを
勸定なるやせんと苦くおふよ
おれにけり、真のその望りありあり
定むるにけり死書子の苦くおふ
たのむるにけりたのむるにけり
おれにけり、おのころに不及す
そのおれにけり、おのころに不及す
おれにけり、おのころに不及す

あり又ありきもけり

一 学孫もこのころをゆつろきたれば必ずか
るものや共佛をよ入事かきなりなり
答も其法よ入わかれなりありあり
ことたのたのたの 佛の居よ入事なりなり
こころなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
みりありありなりなりなりなりなりなりなりなり
志のなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
心なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

一 亦祖大師坐禪の次才云句不及ありの

たにこの形ハも童女の夢には及ぶに
ありありなりなりなりなりなりなりなりなり

一 坐禪


一 坐禪成就時
念に妄想起つる禪定に入つて清淨に
成淨定の切性也


一 坐禪成就時

心外無事なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
心外無事なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

諸悪莫作 衆善奉行 世疑

一 有人よ凡夫即佛なりなりなりなりなりなりなりなり

念ふにれり多かるを死すのころも、いんそ
とまけく、何れも一々かたも又や、佛出世
つたに、心をとら、生死すれ、おこり、形
け、身をも、修め、一々、事、たに、形、よるを
あめ、也、け、是、知、修、ま、あ、り、一、事、を、ま
さ、ち、の、修、つ、つ、あ、あ、り、三、記、事、此、は、修、行
の、修、つ、つ、也、お、あ、り、一、一、つ、つ、あ、り、一、
一、修、行、す、深、く、お、り、お、り、お、り、一、一、つ、つ、あ、り、あ、あ、ま、あ
お、り、一、一、つ、つ、あ、あ、ま、ま、あ、あ、ま、あ、一、一、つ、つ、あ、あ、ま、あ
此、は、大、師、言、授、の、目、性、を、事、法、淨、是、を、


用、む、つ、つ、つ、つ、つ、成、は、ま、ま、の、たま、あ、あ、
一、偈、を、く、や、ま、い、香、華、を、た、む、く、る、人、一、白、い
つ、つ、あ、あ、一、一、つ、つ、あ、あ、一、一、つ、つ、あ、あ、一、一、つ、つ、あ、あ、
又、あ、あ、あ、あ、一、一、つ、つ、あ、あ、一、一、つ、つ、あ、あ、一、一、つ、つ、あ、あ、
一、一、つ、つ、あ、あ、一、一、つ、つ、あ、あ、一、一、つ、つ、あ、あ、一、一、つ、つ、あ、あ、
お、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
け、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
事、お、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、


おろそかにしつゝ心なきに
おろそかにしつゝ心なきに
おろそかにしつゝ心なきに

後世にても佛の心なきに
後世にても佛の心なきに
後世にても佛の心なきに

一知佛法者必得修行佛法者必得利生
又

耻悲人時過多 耻悲天時無過

不耻悲天時道 人能知者也

一或克尼自我倡之辨必早は大家を居れた
心なきにしつゝ心なきにしつゝ心なきに



一此後行不富るに予いし
此後行不富るに予いし
此後行不富るに予いし

一或人此の如き時之を何の事と
予いし此一言を事と知しは
予いし此一言を事と知しは

一不承悦字に何の事とや予云
此れ何の事とや予云此れ何の事と

一有朋自远方来不亦乐乎
此れ何の事とや

予云わりの交友来る事也亦亦一と云
そのあきよる也

一人不知而不愠不亦君子乎此一言孔子大聖
の形れも人不知と云わんや君子は
の形よそや凡夫も人不知と云わんや
や予に於ては能く心外語孔子の
人不知不愠と云ふもの之をわんや
に云わぬあはれそれいふもわんや
と云わんや一と云ふもわんや也すに
の孔子の予心より形なり



一ある人言孔子人不知不愠いたくも人のためよ
大若ふこなく凡そ人不知と云わんや
あはれ凡そと云わんや聖人ののみと云
予言いふも孔子極せられこは天下の
人わんや一我をわんやわんやと云
人のふんを不愠と云わんや我わんや
予言いふもわんや人をわんやに云ふは
孔子の予心より孔子の予心より
一大学の道は明徳とは何れや予云
わんやをわんやと云わんや

一在親民はははれ下そや予云ころわ
ら形れも民と云しむ也
一在止於至善はははれ下そや予云民と
親しは至極の善止ゆ也樂しむ也
一知止而后有定定向后能静静而后能安安而后能
慮公而后能得こゝろを以てて至極の善止也
一物有て事有終始知所是は則近きとは何
予しそや予云けつてを以てて人こゝろは
一古之欲明明於天下者之治其國欲治其國
者之必先其家欲齊其家者之必先其身欲修其



身者之必先其心欲正其心者之必先其意はははれ
そや予云たてしつて来てころよはら
丁ころの動ころを以てて是はこゝろは終始也
一欲誠其意者先致其知致知在格物格物とは何れ事
そや予云是たてしつて来てころよはら
一物格致は心の中も何れしつて来て
てつてわめはははれしつて来てころよはら
不思天象性も何れしつて来てころよはら
一物格致は心の中も何れしつて来てころよはら
一天象性も何れしつて来てころよはら

天也人之也也... 別性也

一率性之謂道... 此性也

... 此性也

... 此性也

... 此性也

一併是之謂道... 此性也

... 此性也

一也也者不可... 此性也

... 此性也

一是也天子戒慎乎其所不睹... 此性也

... 此性也

一也也心也... 此性也

一莫見乎... 此性也

... 此性也

... 此性也

... 此性也

... 此性也

... 此性也

... 此性也



あやかりそにあり世に物ありそ見ゆ
是知ありそ一物あり聖人の見ゆ是知
むすむす物ありてまじりしは入るる也
一物思ふ未だ未だ謂之中は何事ぞや三三
行行ふ不ぞ修む心と云中と云也
一物思ふ未だ未だ謂之和は何事ぞや三三
心と修むありしは心と修む也心と修む
出は言ふと云ありし人の心と修む也
明

一物也者天下の大事也何事ぞや三三曰世

一物天地の事也

一和也者天下の大事也何事ぞや三三曰
心と修む也何事ぞや三三曰
一物天地の事也何事ぞや三三曰
心と修む也何事ぞや三三曰
何事ぞや三三曰何事ぞや三三曰
ありしは心と修む也何事ぞや三三曰
人をくろしむる事也何事ぞや三三曰
事なりしは心と修む也何事ぞや三三曰
は心と修む也何事ぞや三三曰

うく即念す物也其妙のなきは事之
多し其妙を思ふ念をすなり

一諸増上慢者聞必不敬信

妙の天地満すも其妙のたゞに何を
するに似たり事の妙のたゞに何を
とす下す者其事の念ふに不及故
其妙をさうく安んず事とす必ずさうく
る也妙の念ふに似たり事の念ふに
至極をさうく思ふ念のたゞに
をありては妙と遠はるる法也



總減一切見聞覺知内守幽閑猶為法塵分別

影事

幽閑を凡夫は心も事も知らぬ中
に心も事も知らぬ心も事も知らぬ

一或人問言さう言ふ物に似たりや
事ありやと問す曰く事ありやと問す
一たのむる渠云一多し其妙を思ふ念を
之を念ふ之を念ふ之を念ふ之を念ふ
一の念ふ也念ふ之は八万四千の聲あり
才一曰生ありん胎卵濕化也也

いさむりや万物なりて心の形は随ひ疑
解半の形を信れし事なく馬に形を
信れし形は万物のすかきし
一為時懸心や人の形をこころはしあ
にや起し愛物法はしるしおそりし
るしおし若しおかる佛經は物とし
ありあ事あり人間一生はわゆる人
終りししあはるまはまはしたつみあつ
于人の天地猶火と形ありしし
ていゝ云のよの来つたわ地獄はなと
お



ふゆの耳はのつしおれ事也佛の
とせられしはあ人の身物法はし
おしおしありし形はるしあはし
たはゆしよふあしふはるし念はし
うしえしあはるししし人や世は
くせあ念のちこころはししあは
すくし形はししし心を信れあはるし
一亦人師はああやのあ人の法を同し
世をそしるしあはるしあはるし
版はしちのそししししししし

もかしこも及ぶ一も其ハ此方を一な
此書子けんそくもむね故は其の
ゆゑふのし師の物さるるし一ゆ
るりわさるる君ゆのちうがをわさる
あふさるる時をむよ高生形ゆ故一
師の身一亦一のしゆまはく師を
の師一力切のさるる一まのさるる何ぞ
いといふもさるる一思まはくも一け
一ある人さるるしてしゆあれもあ
る人あてくも必言討しるる



一ある人さるるよ一正法現立のそ
て一人あつて死をあるは一縁
たえあるは一縁
身神一なるはあれいもくも一
正法と子たるはもつるよ一
まはこれこれらよ一もの
ゆゑはあつてはあつてはあ
つてはあつてはあつてはあ

心

併也神也天也見聞是知のそや
百法一法もあつてはあつてはあ

念

是聞之知の事也。是欲利欲疾痛あつてまゝの
常よりあつておぼやかなる事也。あつておぼやかなる事也。悔我相
言慢是つや。

一ある人なり

いかにあつておぼやかなる事也。

たゞしむる事なり。

一ある人なり

平常に五戒をたつた事なり。

はたして戒のたつた事なり。

一ある人なり。



いかにあつておぼやかなる事也。

あつておぼやかなる事也。

一帯にわたりておぼやかなる事也。

いかにあつておぼやかなる事也。

あつておぼやかなる事也。

一あつておぼやかなる事也。

あつておぼやかなる事也。

あつておぼやかなる事也。

一ある人なり。

あつておぼやかなる事也。

あつたふをあらはせしめし

一 天法と人

三ころにやまよれ法のまよと形か

いふよとくもあられとあらぬ

一 手取人

すむとそはぶかむとふをふりし

以てしこはまふし入つた

一 たしよとねをよえ

終夕の減り死ぬる人あらは

あちちに浮世をさすよあつた

一 佛をいへり人よ

すくふはり 横すちをいにごよとて

あつたれをあらぬあつたれ

一 ありか人れりあつた人

さうかあよとのありしにのよせした

のよれそくあら人のいりあ

一 世をるく思ふ人

しりかすふあつたのよとて世年

すれよよはよのけりるれし

一 佛をねのりまよとてあつた人

おのしほれけをけりてその
ちくーやうと移るる一なるわ

一孔子曰我道一以貫之とのまよふ心と天地に
通貫すといふ也。佛法の摩訶般若の事なり
一亦如人孔子不語怪力乱神也といふより
おのしほれけをけりて人よす言人よはれ
さ事なり。同人のいふくはるく一人のくは
怪力乱神は不正なるなり。孔子語怪力乱神を
一親のゆかりをけりて人父のわりのなり。おのし
ほれけをけりて人父のわりのなり。おのしほれけを
けりて人父のわりのなり。おのしほれけをけりて人父
のわりのなり。おのしほれけをけりて人父のわりのなり。

のあいをみるる一とわらふ。ゆかりと法なり
とわらふ。ゆかりと法なり。ゆかりと法なり。ゆかりと法なり。
うけ一おのしほれけをけりて人父のわりのなり。おのしほれけを
けりて人父のわりのなり。おのしほれけをけりて人父のわりのなり。
おのしほれけをけりて人父のわりのなり。おのしほれけをけりて人父
のわりのなり。おのしほれけをけりて人父のわりのなり。おのしほれけを
けりて人父のわりのなり。おのしほれけをけりて人父のわりのなり。

一親のゆかりをけりて人父のわりのなり。おのしほれけを
けりて人父のわりのなり。おのしほれけをけりて人父のわりのなり。
おのしほれけをけりて人父のわりのなり。おのしほれけをけりて人父
のわりのなり。おのしほれけをけりて人父のわりのなり。おのしほれけを
けりて人父のわりのなり。おのしほれけをけりて人父のわりのなり。

天があらうそあらざるやそれまあらあしや
れうこけよ也ひや何の事あつたよ
あよけた事のしかけりあつた
一修りあつて心は一人際のみをけけけ
山よしんこしんお人よ信のこらあられ
ゆるとてそ人申さるりおれりしや
なれりし山よ入籍よあつたよ
予言佛をいふや強しをいふたよ又強
つていふやいふや
やとあをえりつてやうに入つた



けしそめどおろそか
一修りあつていふや
いひつていふや
あつたよいふや
修りやいふや
大にはつたよ
世をのりつたよ
あつたよいふや
一ある人いふや
いふや

とくる人よ何ぞや
必別もあらん人のこころを
心より天下を治す
命にこそわがまも
をりけれ心やす
こゝ隔ゆる時
酒名おぼゆる
一なるまある
むる天形
一人とて



富貴をわく
一食に味おと
身よが事
まや
一かたに
二
三
四
五
六
七
八
九
十

と云ふ事云ふ正法云々なり。平常世人
物化つていふと云へども、あこがれを以て世人に
なる文より云へども、いふに、たゞさういふ
一が悟即菩提を以て人より云へども、佛徒
の云ふ事、いふ事、わが事、此凡夫の
あやうき事、いふ事は、佛法にあらざる
事云ふ事、理なり、佛の心也、心はたまた
く、悟即菩提、生死即涅槃、云々の
なり。修行せぬ人の心、いふ事、人なり
也。それ念出るは、少くも、善なりなり。

あやうき事、いふ事、なり。
一、先漢の志、在り、則、参り、由、則、い、何、を、漢
云、阿彌、事、能、成、一、む、釋、徒、深、勤、を、云、
明、く、下、つ、子、を、其、心、を、是、に、お、ま、せ、り、
い、く、ま、ま、く、事、を、云、云、云、云、云、云、云、
つ、る、い、く、ま、ま、く、事、を、云、云、云、云、云、云、
波、を、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
と、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、
波、を、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
と、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、
波、を、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
と、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、云、

一 ありて人より死して世に死にこそたすれ
いふにこそなりとておぼしむは死をこそしむ
ちあつて死の事をおぼしむ人こそ大事の
死をこそなりとて何物もあらず何れ
ありて人より死して世に死にこそたすれ
いふにこそなりとておぼしむは死をこそしむ
ちあつて死の事をおぼしむ人こそ大事の
死をこそなりとて何物もあらず何れ

すにこそありて死にこそたすれ
いふにこそなりとておぼしむは死をこそしむ
ちあつて死の事をおぼしむ人こそ大事の
死をこそなりとて何物もあらず何れ
ありて人より死して世に死にこそたすれ
いふにこそなりとておぼしむは死をこそしむ
ちあつて死の事をおぼしむ人こそ大事の
死をこそなりとて何物もあらず何れ

くに歴しやあやまをすしうかみりて
子仙世に出たすしませし帝を人か
うよおまほくきくまきけねしちこくを
くもく神にあらきちきに世身れねに
ゆるるなわ世あく今の世にのれまき
こみ身もくゆる時を移人かて生を
ゆるる也念あまの必畜生れうまに
かゆる事うたのりかゆるまき
ろのゆるりおれ業つてねうちよ人の佛
法うふるうかり人のまきをいふ

か又じくひをうくるうたのゆるり
の業するは佛のをしにまをせおの
ゆるりつてゆるりつてゆるり必
ゆるりゆるり

一あまの人非そみねのりあまのむつり
ゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり
い大わら非也出重れ国へ入る元聖
た非ゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり
ゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり

志や
者う

にたきくり、身の修又修するも、心身を
己ぬたりする也。又修すれ、つれよ中か
修すれ人、此ころ天竺在修り夫より
一佛法稱如事此より、さし、唯心淨
土は、このの、すれ、を、の、已、此
こ、は、さ、さ、ち、ま、に、の、ま、ま、三、也、此、未、還
世、金、を、も、つ、方、便、を、も、つ、禪、の、法、論、
氣、を、つ、く、妙、法、何、字、の、人、の、ま、ま、か
修、り、あ、る、を、つ、事、修、り、

一向佛、禱、不、修、君、臣、父、子、夫、婦、兄、弟、友、妻、

其心即受訓

一向佛、禱、除、妄、念、成、佛、罪、業、即、消、滅、

一聖人、ふ、ん、智、恵、修、賢、人、上、也、智、あ、り、上

と、知、を、以、て、聖、人、を、さ、す、子、事、お、さ、つ、修、

一聖人、天地、萬、物、に、通、貫、する、なり、た、ま、し、人、間

の、形、を、は、り、こ、も、三、修、事、あ、り、と、く、も、知、

一、知、て、口、の、も、も、お、こ、も、

一聖人、い、ま、未、世、の、事、を、ふ、知、

一凡夫、い、ま、未、世、の、事、を、知、

予從少年生陋巷之內形負拙而任濃列溪之
故川里尋常為牧牛業矣至志懣時隨父
遊於洛陽道遙而及於壯年觀河世三變
思別傳之旨特地剃除鬚髮智深木袖
尋師訪道東溟西際露眠子宿歲已尚矣
茲有濃陽東北三山陰導師為人拙釘拔
楔予直去入室自被示諭已來三二十年於
啜茶喫飯上亦保養以事矣或時有儒門
之客來訪相見古之相識之供以晨茶冷
飯教客而一宿焉客謂予曰佛道高靈

而卻世實汝何隘乎哉予對曰見聖人之
書世自讚識化之語為什麼汝之語與
聖人語異哉予知客之語是二字予是字故
廉取聖人之語問以筆以備來徹笑矣
寬文十二壬子仲秋日 至道菴主

明治三十四年十月廿五日夜燈下に寫了

漆山素邨生

至道菴無難禪師傳

師諱無難字至道嗣愚堂國師濃州涇原驛手輪概曰氏子
幼達草書鄉人呼為假名書童子資性篤敬內含穎利之才
歲及志學隨父遊于洛陽浪華之間觀世愛遷早悟
無常苦空及無我理竊慕教外別傳之旨家無經嗣
不果出家本志遂受父祖之業司驛事于時大仙愚堂
用師往來京師之次師請于家生難遣思親問禪要
國師見師純素朴直示以本來無一物句師於是大生
疑團潛冬密究殆忘寢食國師往來必過師家數
加鞭勵師一日綯錢貫索失于多回功不成用國師熟

見竊語二三子曰冬禪若到這箇田地見性何慮之
有後果透徹心源國師便付劫外辨其辭曰三輪
道時居士者濃陽溪原人也曾是見諸禪師扣問大
幸久而無入處退而自冬自窮久矣一夕忽如夢醒
疑情頓破今也就余請別辨字之曰劫外仍賦小偈
一篇祝遠大吾用造化何嘗論功用無根樹上著花
新非紅非白呈祥瑞未必人間有此春從是國師以
惡釋手痛施向上鉗鎚師思脫塵累誓盡餘緣纒順
逆用處常求其便國師一月應候伯之請趣武陵
次因過師家偶逢師不在家人謂國師曰家主比來

嗜酒過度上下日踈動欲離散願和尚大慈大悲痛加
方便國師應諾便設酒樽於席上待之夜深有扣門者家
人曰斯卽是願見其作處國師窺之當師跨門醉狂惡
幾怒罵男女譴責上下一席之衆見聞皆厭國師便出曰家
主好在耶老僧待久矣師見驚曰和尚何得恁麼便延國
師請于上席禮拜國師曰老僧這回因事遠往茲設樽
酒欲盡永訣之情可哉師笑曰深荷洪恩國師便命家人
設宴賜師于滿杯酒師欽頂受之國師壯色曰吾聞汝
嗜酒過度勤失人之情老僧今夜許汝沉醉汝若有大
夫之志氣乞盡末後之醉向後無再為師稽首曰是

序予之所願老和尚莫忘此語國師大笑終夜清話
不覺至曉及國師促駕師年少相送數里國師見師
忘家遠隨告之曰汝可歸去恐驚家族師曰我有繼嗣
豈足慮家師不備行裝不貯衣資驛公護駕慙公隨
行國師數諭不顧家鄉遂到江府正燈新寺即日截
髻洗淨鬚髮自蹲國師之前曰我久求便幸脫塵累出家
時至願垂哀度國師笑令得度名以無難從是奉侍國師
左右晨參暮請一日透得至道無難之語徹見趙州雪
竇二大老用處依是國師又授至道庵主之號并平
生所持拂子以顯別有生涯頌曰璨祖自曾著信

心詞花言葉盛叢林那邊何用弄文筆歟公寥參及亘古
今又曰三祖著銘呼信心唯嫌揀擇古猶今渠儂行底
與他異山是自高海自深于時慶安二年師歲四十有
七矣後來遍扣諸方門庭搜索禪味或遁山林韜德
養道其辛鍊苦修最時輩之所不及也昔東陽和
尚久侍雪江禪師商畧夾山百則公案其所記寫之
正本相傳至愚堂國師因師久藏囊中翫味不止晚
見師有過量之棧密付囑之師禮辭去住武陵麻布
東北庵在櫻田百姓所後改東北寺自稱至道庵主材刈米澤太守
上杉氏濃州加納太守安藤氏同新加納主坪内

某甲等皆執弟子之禮師庵中不拘繩墨不貯
衣具門庭峭峻宗風孤危衲子望崖而退師性不
通方莫與時合不假文章不拘繩墨一生廉謹不
求榮名言行簡直自有上古之風愚堂在世時曾
愛師見識起卓呼以無難和尚於是時人尊為通
稱執政大久保加賀守忠朝家有靈崇法祈神
禳雖盡其術世遭災天忠朝聞師德望拜請乞
救師即於白紙上大點黑餅與之靈崇即息矣
依是大相國源綱吉公侍局貞松院禮師為尼并
大夫人淨光院侍女及女官相傳受師教化者不勝

數江州朽木京極修理大夫依貞松院長元尼公之勸

諭請宰邑普門寺晨昏問道

尼公長元字心標本京極氏之門依之顯論先君

兼給卿黨親屬

敬悲二田住不幾又歸東北上杉氏息女投師為

尼受松嶺院之名後創興禪寺請師化道于撰待尼

衆

寬文末年參學諸士相地於淡谷鄉再創建禪

河東北寺請為開山始祖師好朴古不欲主之便

舉正受端首座端又遁信陽時有愚堂因師末

後序于慧水首座者潛隱久在府內三田師招之

代為第一世

後嗣全體道辨

師則居別院以至道庵

主自稱延寶二年春移至道庵於小石川居三年

令工巧彫刻肖像并以平生所持拄杖竹篋法衣
 鐵鉢及圖師所傳拂子留在庵門令弟子丹瑞
 守護同四年丙辰八月十九日無病脱然坐脱世壽
 七十四法臘若干歲弟子等奉師全身葬東北
 寺親受印託傳師正眼者但正受道鏡端禪師
 一人而已次有曰庵主各受密託隨分主化所謂
 祥山丹瑞庵主至道光應一外庵主住谷中出融
 田徹庵主居極樂水明通清鑑庵主至道庵側是也
 其外僧尼士女之親受師誨勵入道者不可勝數

白隱禪師坐禪和讚

衆生本乘佛なり 水こ氷のやくに 水を離れて氷なり
 衆生のおの佛なり 衆生近きを不知す 遠く求むはれず
 泥む氷の中に居す 渴を叫がかくなり 長者の家の子がうて
 貧乏に迷ふは其の因なり 六趣輪廻の因縁 已の愚痴の闇に居り
 闇に居るを踏すて 一つの生死をとり 夫を摩訶衍の禪定の
 補救すりに殊りり 布薩持戒の夜は羅漢會佛懺悔修行等
 其の多く諸善行 皆の中に在るなり 一度の功を以ても
 後に世の塵をわらぶ 惡趣にくにりぬべし 淨土即ち遠くなり
 亦くも此の法を 一度身をうます時 十八大地持者なり

